

アスリートに対するセカンドキャリア支援プログラムの検討
～心理学的エスノグラフィーによる質的アプローチ～

研究代表者 豊田則成

目 次

研究の概要	1
I 研究の背景	2
II 研究の目的	3
III 研究の成果	3
【課題 1】既存のセカンドキャリア支援プログラムの検討	3
【課題 2】アスリートが直面する心理社会的発達課題の同定	7
IV 総合的考察(【課題 3】アスリートの「人生支援」へ向けての提言)	18
謝 辞	19
引用文献	19

アスリートに対するセカンドキャリア支援プログラムの検討
～心理学的エスノグラフィーによる質的アプローチ～

研究代表者 豊田則成

要 約

本研究の目的は、アスリートのセカンドキャリア支援プログラムを検討することにある。この目的を達成するために、【課題 1】セカンドキャリア支援プログラムの検討、【課題 2】アスリートが直面する心理社会的発達課題の同定、【課題 3】アスリートの「人生支援」へ向けての提言、という3つの課題に取り組んだ。

【課題 1】では、国内外に既存するセカンドキャリア支援プログラムを概観し、その特徴を検討した。その結果、国外のプログラムでは、1) 国家的な支援の下、プログラムが運営されていること、2) より競技力の高いアスリートへと支援対象がシフトしてきていること、3) キャリアカウンセリングを中心的な介入方略としていること、などが特徴として挙げられた。一方、国内のプログラムでは、JOC セカンドキャリアプロジェクトとJリーグキャリアサポートセンターに着目し、1) 現役時代を充実して過ごすための一環としてキャリア教育を展開していること、2) セカンドキャリアを構築するための具体的な就学・就職支援を展開していること、などが特徴として確認された。

【課題 2】では、「アスリートは、キャリアトランジションをどのように経験するのか」といった RQ の下、全日本代表選手としてのキャリアを有していた元アスリート7名（男性3名、女性4名）に対して、集中的なインタビュー調査を実施し、質的なアプローチを行った。会話の分析から 33 個のカテゴリーを生成し、意味内容を検討した上で、最終的に7つのカテゴリーグループを生成し、概念図を作成した。その結果、『アスリートは、アスリートとして築き上げた自信を背景に、アスリートではない新たな役割を獲得していく。これには、アスリートであることから心身ともに解放されることが寄与する。その一方で、アスリートではない新たな役割を獲得するとともに内面ではアスリートであり続けるといった両行を経験し、そこでは、後悔や虚しさを伴う。特に、アスリートであったことに負目を感じていることが、アスリートではない新たな役割の獲得を抑制してしまうこともある』という仮説的知見を導き出した。

【課題 3】では、【課題 1】と【課題 2】を総合的に勘案した上で、アスリートの「人生支援」へ向けて、《提言 1》セカンドキャリア獲得に向けて外的なキャリアと内的なキャリアのバランスを図る、《提言 2》現役生活を充実させるためのセカンドキャリア支援であるという位置づけを図る、《提言 3》アスリートとしての役割がアスリートではない新たな役割のベースとして折り合いをつける、《提言 4》アスリートが複雑な心境であることを理解し、折り合いをつけるような取り組みを促す、という提言をするに至った。

I 研究の背景

アスリートがアスリートでなくなる意味と何か。本研究は、このような素朴な疑問に端を発している。

そもそも、アスリートが競技引退を迎え、次のキャリアへトランジションするプロセスにおいて心理的困難を伴うことが指摘されて久しくなる(Gordon, Wilson & Barrett, 2005; 小川ほか, 2009)。このような問題に対して、国外においては専門的な介入方略が実践され、先駆的な成果を残してきている。そして、それらの成果に倣って国内においても大きく2つの取り組みが2003年を皮切りに開始されている。本研究は、これらを概観し、アスリートのセカンドキャリア支援プログラムの現状を把握することを課題として採り上げている。

また、本研究者は、アスリートのキャリアトランジションに対する心理的支援をテーマとした研究に継続的に取り組んできている(豊田・中込, 1996; 豊田・中込, 2000; 豊田, 1999; 豊田, 2006; 豊田, 2007)。そこでは、一貫して、アスリートが一生涯を通じて充実したキャリア発達を果たしていくために何が必要であるのかは、慎重に議論されなければならないと主張してきた。例えば、豊田(2007)は、元オリンピックの転機についての研究から、次のような知見を導き出している。すなわち、元オリンピックにとって『転機』は、様々な出来事として捉えられている一方で、達成・満足ー未練・後悔といった相反する意味づけの間で揺れ動きながら、自己の変容や行為の拡大、関係の深化といった転換を相互作用的に獲得していく発達の移行過程(developmental transition process)として意味づけられている(Fig. 1)。このような取り組みから、アスリートのキャリアトランジションに伴う「心の揺れ」をこれまでに確認している。

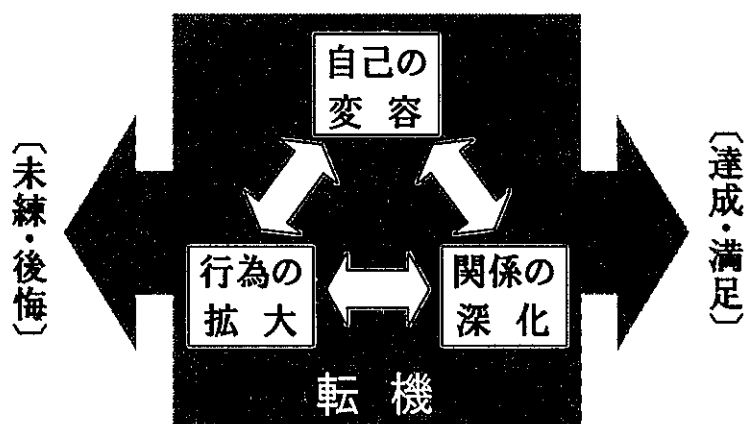


Fig.1: アスリートの「転機」についての語りの特徴

次に、本研究の独自性について触れてみたい。まず、アスリートが競技引退に伴うセカンドキャリア獲得に至る中で直面する心理社会的発達課題を同定するために、「フィールドワーク」(佐藤, 2006)という手法を用いて「心理学的エスノグラフィー」を記述することは他に類を見ない。ここでいう「フィールドワーク」とは、調べようとする出来事や事象が生起している現場に、研究者自らが身をおいて内的体験を共有・共感し、調べようとする「場」の文化を丸ごと理解するばかりでなく、そこに生きる「個人」をも理解しようとする営みのことを指している。これは、他の研究手法で意味するところの「参与観察」としての性格を有しており、本研究の場合、アスリートがアスリートでなくなる経験を有する個々の生活世界に研究者自らが身を投じ、彼らの内面を研究者自らの観察眼をもって記述し、それを分析の対象としている。このようなことから、いわば研究者自らは、アスリートのキャリアトランジションに伴う内的事実を「経験」する実験装置そのものであり、これにより研究事象(本研究の場合、アスリートのキャリアトランジションを指す)の本質を議論するばかりでなく、

それを捉える研究者自身の「経験」(本研究の場合、著者自身を指す)をも議論の中に取り込もうとする間主観的な取り組みを遂行している。

ここで、配慮しなければならないことは、研究者の観察眼が、いかんにして主観を排除し、客観性を高めるかといった議論にとどまるものではないという研究の立脚点である。本研究では、むしろ、本研究者の観察眼を通じて見える事象を記述し、質的に分析するわけであるから、読み手には書き手の目線となって研究事象を理解することを求めることになる。なぜならば、そうすることによって、本研究によって導き出された「心理学的エスノグラフィー」は、その妥当性を議論するというよりは、妥当化の一途をたどり、発展継承可能な議論へと変貌することが期待できるからである。そのために本研究で実施された、フィールドワークを構成する代表的な手法である半構造化インタビューは、質問項目にある一定の構造を有するが、それに囚われることなく、自由な形式での「生」の会話を捉えることができる。

また、本研究は「語り」の研究と称しても過言ではない。個人の「語り」に耳を傾けながら、その「語り」を解釈的に理解し、質的に分析することから、発展継承可能な仮説的知見を導き出していくといった骨の折れる作業に他ならない。しかしながら、この骨の折れる作業から「心理学的エスノグラフィー」を記述することこそ、個人の内面に接近できる可能性を見出すことができると考えている。

II 研究の目的

本研究は、アスリートのセカンドキャリア支援プログラムを検討することを目的としている。この目的を達成するために、本研究は、下記に示す3つの課題を段階的に設定し、遂行された。

【課題 1】 既存するセカンドキャリア支援プログラムの検討	(III 研究の結果)
【課題 2】 アスリートが直面する心理社会的発達課題の同定	(III 研究の結果)
【課題 3】 アスリートの「人生支援」へ向けての提言	(IV 総合的考察)

III 研究の成果

以下には、上記の【課題 1】と【課題 2】について研究の成果を提示した。

【課題 1】既存するセカンドキャリア支援プログラムの検討

【目的】

ここでの課題は、アスリートに対する既存のセカンドキャリア支援プログラムを質的に検討することにある。具体的には、国外のプログラムの事例と国内のプログラムの事例について、問題点や検討事項を整理する。そのために、「既存のセカンドキャリア支援プログラムにはどのような特徴がみられるのか」といったリサーチクエスション(Research Question: 以下、RQと称す)を設定し、検討した。

【国外の既存のセカンドキャリア支援プログラムについて】

次頁の Tab.1 に、国外の既存のセカンドキャリア支援プログラム 32 事例について一覧表にまとめた。各事例は、その名称とプログラムの開始年、国名、支援機関、支援対象、実施内容、実施背景、プログラムの理念をそれぞれの項目とし、まとめられている(筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト、2006)。これらの内容を検討した結果、3点の特徴を読み取ることができる。以下にその特徴を列挙する。

Tab.1 国外のセカンドキャリア支援プログラム (32事例)

名 称	開始年	国 名	支援機関	対 象	内 容	背 景	理 念
—	—	Canada	トロント大学	学生アスリート	インターンシップ	学生アスリートの社会的貢献を求める	職業準備
Life Service	1985	Canada	オンタリオ州スポーツセンター	ナショナルレベルのアスリート	資金援助、ワークショップ	オリンピックから戻ってきた選手のサポートの必要性	生活のサポート
Shadow Program	1990	Canada	Canadian Olympic Athlete Career Centre	ナショナルレベルのアスリート	メンタープログラム	—	—
Post Olympic Excellence Series	—	Canada	カナダオリンピック協会	オリンピック	メンタープログラム	—	—
ACE Program	1990	Australia	ビクトリア州スポーツ研究所	スカラシップホルダー	学業、職業、発達の移行に関するプログラム	—	スポーツ人生の成功
Player Development Program	2002	Australia	AFL選手会	AFL選手	インターンシップ 教頭教育推奨	AFLのイメージアップ	引退後の生活支援
Education & Welfare Program	1999	Australia	NFL	NRLクラブ	資金援助、ワークショップ	選手生命の短命化による引退後の支援の希求	引退後の生活準備
Player's active assesment	2002	Australia	NFL メルボルンストーム	クラブ所属選手	教育プログラムの推奨	選手からの強い要望	—
Career transition	2002	Australia	NFL メルボルンストーム	クラブ所属選手	職業訓練 キャリア開発支援	選手からの強い要望	—
ACE Program	1995	Australia	AIS 国立スポーツ研究所	AIS入寮選手	学業、職業、発達の移行に関するプログラム	—	スポーツ人生の成功
Sydney University Sport Scholarships	—	Australia	シドニー大学	スポーツ奨学生	奨学金制度 学業との両立推進	大学のステイタス向上	アカデミックサポート 引退後の職業轉換
Career Transition Scheme	2001	Australia	Rugby Union 選手会	ユニオン選手	インターンシップ 学業推進	プロ化に伴う必要性	ラグビーをしながら引退後に備える
ACE & Professional Development Program	1996	Australia	ニューサウスウェル州スポーツ研究所	スカラシップホルダー	学業、職業、発達の移行に関するプログラム	—	スポーツ人生の成功
Aspire Program	2003	Australia	Hudson	オリンピック 元オリンピック オリンピックを目指す	カウンセリング 職業轉換	Olympic Job Opportunityの発展	競技と就労の支援
—	1967	Germany	Stiftung Deutscher Sporthilfe	オリンピックサポート を受ける選手	各種資金提供	国家的ニーズと裏腹に経済的問題から民間主導へ基盤移転	スポーツ活動と就労へ向けた経済的支援
Career Consulting	1988	Germany	Olympiastützpunkt	オリンピックサポート を受ける選手	学業、職業、軍務との両立	元々はトレーナー支援	—
Sport Com.	1987	France	INSEP	トップアスリート	ジャーナリスト育成プログラムを競技生活と並行して提供	世界選手権に参加した女子学生が、欠席を理由に退学処分を受けた	アスリートのジャーナリスト転身への支援
Double Career Support	1984	France	フランス政府 スポーツ青年アソシエーション省	トップアスリート	文武両道支援 各種資金援助	1984年のスポーツ法制定に伴って設立	競技と就労の併行支援
Athlete Career Management	—	Switzerland	スイス オリンピック委員会	オリンピック	提携校へのアスリート入学紹介	アトランタ五輪不振を受けてアスリート環境の改善が課題となった	キャリアサポート
Performance Lifestyle	2001	UK	イギリス オリンピック委員会	エリートアスリート	自己管理能力の向上 学業、職業との両立	ACE UK Programの発展	競技生活で得たスキルを引退後に生かす
ACE UK Program	1998	UK	イギリス オリンピック委員会	エリートアスリート	キャリアプランニング	ACE Programをイギリス事情に合わせて改変	引退後に準備することで競技生活に集中する
Women's Sports Foundation New York	1994	U.S.A.	WSF Athlete Service	女性アスリート アフリカ系アメリカ人 アスリート	パーソナルスキルの向上	TITLE IXについての認識が拡大した	女性アスリートの教育機会の提供、主張支援
Career Assistance Program for Athletes	1993	U.S.A.	アメリカ オリンピック委員会	オリンピック	生活能力の向上 キャリアカウンセリング	—	スポーツからのトランジション支援
Olympic Job Opportunity Program	1992	Australia	オーストラリア オリンピック委員会	オリンピック	キャリア分析 適性検査	—	就職轉換
Whole-istic	1990	U.S.A.	アメリカ大学 アスリート協会	学生アスリート	キャリアカウンセリング 学業支援	—	学生アスリートへの将来設計支援
Making the Jump Program	1989	U.S.A.	スプリングフィールド大学	高校生アスリート	キャリアカウンセリング 受傷アスリートのサポート	—	高校から大学へのアスリート支援
Goldstart	1989	UK	イギリス オリンピック委員会	オリンピック	職業に関する情報提供 再出発の準備	—	競技以外の興味の拡大
Lifekill for Elite Athletes Program	1989	Australia	AIS 国立スポーツ研究所	AIS入寮選手	キャリアアドバイス 職業スキルの向上	—	バランスのとれたライフスタイルの獲得
Olympic Job Opportunity Program	1977	U.S.A.	アメリカ オリンピック委員会	オリンピック	キャリアガイダンス 目標設定	—	就職轉換
Olympic Athlete Career Centre	1985	Canada	カナダ オリンピック協会	オリンピック	キャリアカウンセリング キャリアプランニング	—	引退後の社会生活へのトランジション支援

①国家的な支援の下、プログラムが運営されている

各国のセカンドキャリア支援プログラムの支援機関の多くはオリンピック委員会であり、いわゆるオリンピックムーブメントの一環として管理・運営されているケースが多い。すなわち、各国の国策の一環としての位置づけがなされていると読み取れる。例えば、1984年にフランスで開始された Double Career Support は、アスリートキャリアをファーストキャリアと位置づけ、セカンドキャリアとの同時的進行を重視した支援策であり、注目すべきは、1984年にフランス国内に制定されたスポーツ法の制定に伴って設立されていることである。また、このような取り組みは、1990年にオーストラリアで開始された ACE Program (Athlete Career Education Program の略称:着想は 1985 に遡る) に端を発し、先駆的な取り組みから各国が模倣し、独自のプログラムを構築し、運営に至っているといえよう。

②より競技力の高いアスリートへと支援対象がシフトしてきている

次に、支援対象となっているアスリートは、当初、プロフェッショナルアスリートからアマチュアアスリートへと変遷を遂げている(豊田, 1999)。ここで挙げた 32 事例の中には、特に、オリンピックを支援対象としたプログラムが多い。これには、様々な社会的背景や理念が影響している。一方、オリンピックが競技力向上へ向けて専心すればするほど、セカンドキャリアに対する焦りや不安の生じる傾向は高まると言わざるを得ない(吉田, 2006)。そのような心理的困難さの軽減や除去を目指したプログラムが構成されている。しかしながら、ファーストキャリアからセカンドキャリアへのトランジションにおいて、スムーズさを求めることばかりが優先されてはならない。なぜならば、外的なキャリアを優先し、トランジションすることによって、内的なキャリアの充実が疎かにされてはならないからである。引退後、外的なキャリアの獲得を求めて、アスリートは職業の斡旋を求めがちになる。他方、そのような外的なキャリアを獲得できたとしても、アスリートとしてのアイデンティティが、アスリートではない新たなアイデンティティへと変貌するには、それなりの時間を要することは自明ともいえる。このような複雑多様な問題に、オリンピックは直面しているのである。

③キャリアカウンセリングを中心的な介入方略としている

キャリアカウンセリングをセカンドキャリア支援プログラムの中心的な介入方略とするケースが多い。具体的には、ゴールセッティングやキャリアプランニングなど、様々な介入方略を実践するうえで、1対1の面談形式であるキャリアカウンセリングを重視しているようである。すなわち、セカンドキャリア獲得という難題に直面している個々のアスリートと直接接見し、相談活動を行っているのである。これには、アスリート側にも支援側にも、かなりの時間と労力を必要とする。しかしながら、個人のキャリアを構築していくことは、慎重でなければならないことから、やむを得ない実情となっていることも免れ得ない。

〔国内の既存のセカンドキャリア支援プログラムについて〕

ここでは、国内における2つの先駆的なセカンドキャリア支援プログラムに着目する。すなわち、それは、①JOC セカンドキャリアプロジェクトと②J リーグキャリアサポートセンターである。これら国内における2つの支援策について、その特徴を以下に整理する。

①JOC セカンドキャリアプロジェクト(アスリートプラス:<http://www.joc-athlete.jp/secondcareer/intro.html>)

2004年に、日本オリンピック委員会のゴールドプラン委員会内にセカンドキャリアプロジェクトを立ち上げたことに端を発し、アスリートのセカンドキャリア教育に乗り出す。啓発冊子「キャリアトランジション」の発行

やキャリアトランジションセミナーの開催など、現役アスリートにセカンドキャリアに備えるための啓蒙活動を積極的に展開している。2005年には、トップアスリートのためのキャリアサポート情報 Web サイト「アスリートプラス」を開設し、広くその認知度を向上させた。その後、競技団体向けのセミナーを積極的に展開し(田中ほか, 2006)、2008年には、ナショナルトレーニングセンターオープンに伴って JOC キャリアアカデミーを立ち上げた。現在は、3名の専従スタッフの下、アスリートのキャリア支援を展開している。JOC キャリアアカデミーでは、現役選手が、より集中して競技目標に取り組むためにも、アスリートの引退後の生活設計などをサポートするプログラムや制度を用意しており、選手を支えるだけでなく、アスリートが競技で培った経験を社会に還元する活動もおこなっている。以下に、その概要を示す。

目標

- ・トップアスリートとコーチ、スタッフのキャリアトランジションサポートの総本山を築く。
- ・トップアスリートの人的資源の社会還元を促進させる。

概要

- ・ナショナルトレーニングセンターを中核拠点としてキャリアサポートセンターを設置し、諸機能の集約化を図る。
- ・キャリアトランジションへの心構えと対応スキル習得の動機付けを図る。
- ・文部科学省、行政との連携によるアスリートの職域拡大を図る。

対象者

- ・トップアスリートとコーチ

②Jリーグキャリアサポートセンター(CSC: <http://www.j-league.or.jp/csc/about/establish.html>)

社団法人日本プロフェッショナルサッカーリーグ(通称 J リーグ)に所属するプロサッカー選手は約 1000 名いる中で、毎年 130 名の新しいプロサッカー選手が加入する一方で、毎年 130 名のプロサッカー選手が J リーグを離れていく。そのようなキャリアトランジション問題に対して、J リーグは 2002 年に選手の将来をバックアップできる体制の構築の構築を目指し、J リーグキャリアサポートセンター(CSC)を設置している。以下に、その概要を示す。

目標

- ・現役で活躍している間に充実した選手生活を送ることができる
- ・引退した選手がその後も自立して社会生活を営んでいける

概要

1 現役選手のキャリアデザイン支援

- ・プロアスリート OB・OG との「キャリア交流会」の開催
- ・選手個人の社会スキル向上のためパソコンや外国語スクールのクラブハウス開催
- ・学習費用の援助を行う就学支援制度
- ・各種学校との提携
- ・希望する選手へのインターンシップサポート

2 選手のセカンドキャリア支援

- ・進路を決めかねている選手に対する就職や就学の相談
- ・選手の受け入れ先を積極的に開拓
- ・合同トライアウトの開催

対象者

- ・Jリーグに所属する全てのプロサッカー選手

[まとめ]

ここでは、国内外に既存するアスリートのセカンドキャリア支援プログラムを概観してきた。特に、国外のプログラムの 32 事例を概観することで、1) 国家的な支援の下、プログラムが運営されていること、2) より競技力の高いアスリートへと支援対象がシフトしてきていること、3) キャリアカウンセリングを中心的な介入方略としていること、などが特徴として見出すことができた。一方、国内のプログラムの 2 事例からは、対象がアマチュアアスリートとプロフェッショナルアスリートの差こそあれ、1) 現役時代を充実して過ごすための一環としてキャリア教育を展開していること、2) セカンドキャリアを構築するための具体的な就学・就職支援を展開していること、などが確認できた。

【課題 2】アスリートが直面する心理社会的発達課題の同定

[目的]

ここでの課題は、アスリートがキャリアトランジションにおいて直面する心理社会的発達課題を同定することにある。そのために、「アスリートは、キャリアトランジションをどのように経験するのか」といった RQ の下、質的なアプローチを行った。

[対象]

情報提供者 (Informant: 以降、Inf. と称す) は、それぞれの種目で全日本代表選手としてのキャリアを有していた元アスリート 7 名 (男性 3 名、女性 4 名) であり、キャリアトランジション経験をし、現役引退後 10-20 年経過していた。

[期間]

調査は、2008 年 1 月から 2009 年 12 月に実施された。

[内容]

フィールドワークは、1対1形式の半構造化インタビューを中心的な手法とし、Inf. の生活圏内で実施した。所要時間は、Inf. ひとりにつき、1 時間程度のインタビューを 3-5 回実施した。先にも触れたが、インタビューを実施した「場」は、Inf. の自宅や職場の一室、近くの喫茶店、ファミリーレストラン、ホテルのロビーなど、Inf. の生活圏内であり、なるべく Inf. が話しやすい「場」の設定に努めた。会話の内容について、Inf. 本人の承諾を得た上で、ICレコーダー (Sony 社製) に収録した。その後、収録した内容を全て逐語化し、トランスクリプトへと加工し、分析対象とした。

[分析方法]

本研究では、会話の内容を逐語化し、これを分析対象とし、代表的な質的研究法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (木下,) を参考に、分析を行った。すなわち、1) 本研究の目的に合致した会話の内容をトランスクリプトの中から取り上げ、2) その意味内容を検討した上でカテゴリー名を付し、3) 各カテゴリーの意味内容を検討した上でカテゴリーグループへと集約し、4) 再び、会話内容と意味内容を比較検討した上で、5) カテゴリーグループ間の関係を概念図に表し、6) 発展継承可能な仮説的知見を導き出す、といった可塑的な 5 段階の抽象化を行った。

【結果】

分析の結果から、33 個のカテゴリーを生成した。以下では、その概略を示す。ちなみに、下記の【c(No.):○○○】は、導き出されたカテゴリーの ID とカテゴリー名を表記している。カテゴリー名を付す際、独善的な解釈を回避するため、本研究以外にスポーツ心理学領域に精通している 2 名の分析者を加え、カテゴリー名の検討を加えた。すなわち、ここで示すカテゴリー名は、3名の分析者の合議によって生成されたものである。

【c01: 時間的自由さ】

現役中は、練習やトレーニング、試合など、競技に対して、ほとんどの時間を費やしてきたのが、引退したことで、その分の自由な時間が持てるようになったことを語っている。例えば、Inf.は、「朝は、顔を洗って、まず朝練。朝ごはんを食べたら、直ぐに午前練。お昼を食べて、ちょっと休んだら午後練の開始。夕方、練習が終わったら、夕飯食べて、自主練。そんな毎日でした。引退して一番嬉しかったのは、自分の時間があることでした」と語った。

【c02: 競技以外の選択肢の拡がり】

競技生活の中で、何事も選択する基準は、競技が最優先されてきた。引退することで、競技を優先する必要はなくなり、競技以外の選択肢が増えていく。例えば、Inf.は、「(引退して)、最初は何をして良いのかわからなかった。いつもだったら競技があったから、それを中心に据えて考えれば良かった。競技生活は『何かをしなきゃ』って感じ。でも、辞めたら『何でもしなきゃ』って考えるようになりました」と語った。

【c03: 社会的役割の認知】

競技生活の中では、アスリートという役割に傾倒するのみでアイデンティティを維持していたが、引退して、年齢相応の役割(例えば、女性なら結婚、男性なら職場での昇進)が現実味を帯びる。例えば、Inf.は、「『もういい歳なんだから結婚しなさい』って、辞める前から母親に良く言われていました。そんな時、私には○○<種目名>があるから、まだいいやって思っていました。でも、引退したら、妙に焦っちゃって。周りを良く見たら、私の歳で結婚してないの、私だけでしたから」と語った。

【c04: 自分の手で稼ぐということ】

競技生活は、経済的な支援を受ける機会がある。競技力が高くなればなるほど、道具やユニフォーム、練習着など、競技生活に必要なモノは手に入る。その中であって、自分の手で稼ぐという感覚は全くといってよいほどなかったという。例えば、Inf.は、「選手の時は、ジャージも提供してもらったし、靴もすり減ったらいつでも新しいのが準備されていた。自分で買う必要がなかった。でも、辞めたら、何でも自分で買わなくちゃいけない。そういう意味でも、仕事をして稼がなくてはと思うようになりました」と語った。

【c05: 身体的苦痛からの解放】

アスリートは、競技力向上のためにかなりの強度で自身を身体的に追い込まなければならない。加えて、そのようなハイプレッシャーの生活は、怪我と背中合わせの生活ともいえる。引退することで、そのような身体的苦痛から解放されることに安堵する者もいる。例えば、Inf.は、「引退して、あの過酷なトレーニングを、もうしなくても良いと思うだけで、嬉しかった」と語った。

【c06: 行動範囲が広がること】

アスリートの生活パターンは、練習会場や試合会場、合宿所との往来だけで月日が過ぎていくことも多い。トレーニングするために目的地に向かい、休息をとるために安らぎの「場」に戻る。引退は、こうした単調な生活パターンを広げることになる。例えば、Inf.は、「自宅と練習場との往来だけで時間が過ぎていく。余計な疲れを避けるがあまり、競技のため以外のことはやらないって決めていた。それが、一転して、どこへ行っても監督に怒られることもない。辞めて世界が広がりました」と語った。

【c07: 一時的な注目】

メジャーな大会、ましてオリンピックで活躍することで、アスリートの知名度は想像以上に上がる。応援するファンも増え、引退後の社会生活の中で「△△さんですね。応援していました」と見知らぬ人から声をかけられることもある。例えば、Inf.は、「(辞めた後に)『テレビですずっと応援していました。サインしてください。』とせがまれることもある。自分が一生懸命取り組んできたことが認められているように思えて嬉しい」と語った。

【c08: 競技ができないこと】

自身で決断した引退なのだが、長い間馴れ親しんだ競技に対して、もうこれ以上情熱的にやることはないのだと思うと、どこか寂しい感も生まれてしまう。例えば、Inf.は、「現役のことは『早く辞めたい』とばかり思っていたけど、いざ辞めてしまうと『もうあんなに熱く燃えることもないよな』って、なんか淋しくなるっていうかね」と語った。

【c09: 年齢がいきすぎていること】

競技に邁進すればするほど、それに費やすモノは物心ともに増える。当然のことながら、周囲は会社で昇進し、所帯を築き、それなりの社会的地位に昇りついている。引退した後、就いた職場の上司は、自分よりも若年の場合もないわけではない。例えば、Inf.は、「競技ばかりやってきたから、仕事のことは何も分からない。何をどうすればいいのかも。今さらこの歳で転職する訳にもいかないし。そんな時、みじめだよ」と語った。

【c10: 思い通りにいかないこと】

競技の醍醐味は、トレーニングの成果を自身で確かめることができることでもある。努力をすれば、それ相応の成果を得ることができるという経験をアスリートは積み重ねてきている。でも、引退した後、思い通りにいかないことも多い。例えば、Inf.は、「競技のことならなんでもいける。大体のことは難なくこなせる。でも、仕事は思い通りにいかない。努力したって、自分がどの程度できていて、何が悪いのかさえもわからない。思い通りにいかないことばかり。嫌になっちゃうよ」と語った。

【c11: 社会的認知度の低下】

国民的英雄として称えられた著名なアスリートも、時の経過とともにその社会的認知度が低下することは、想像に難くない。「○○さん、頑張って！」と誰もかれもが声援を送ったアスリートを今は誰が知るのか。いつの間にか、誰も振り返らなくなる。世間は冷たい。例えば、Inf.は、「オリンピック直後は、金メダルの○○さ

んだって誰もかれもが近寄ってきた。今じゃ、誰も相手をしてくれやしない。薄情だよ。あんなに盛り上がっていたのに、今じゃ普通以下の人」と語った。

【c12: キャリア範囲の限定】

年齢もさることながら、他の人が仕事に打ち込むのとは裏腹に、競技力向上に専心してきたアスリートが、引退後に自身の有するコンピタンスを生かせるキャリアを獲得することは容易なことではない。例えば、Inf.は、「競技ばっかりやってきたからね。他のこと、何もわからない。できることも限られている。同じ歳の皆が当たり前のようにできることができない。だから、今の仕事、おもしろくないんだけど、続けるしかないんだよ。ね。」と語った。

【c13: 怪我による制限】

競技継続を断念せざるを得ないような大怪我がきっかけで、やむなく引退を迎えるアスリートもいる。過酷を極める競技生活で、現役時代に負った古傷が、引退後の生活に大きく影響することもある。例えば、Inf.は、「骨切り手術を受けました。だから、左脚の方が5センチくらい短い。もう運動はできないねって、お医者さんに言われた時は、ものすごくショックでした。あんなに走り回っていたのに、今は、モルヒネないと痛くて眠れない」と語った。

【c14: 目標のなさ】

競技生活は、まさに、自分の設定した目標に向けて積極的な達成行動を繰り返す日々でもある。一方、引退したことで、その生活様式が一転する者は少なくない。例えば、Inf.は、「現役の頃は良かったね。毎日が輝いていた。金メダルという目標に向かって、全てが前向きな感じがして。今は、あの頃を超えることがない。目指すところがない。先が見えない。だから、なんか、イマイチ、やる気も出ない。出そうとも思うんだけど、無理なんだよね」と語った。

【c15: 競技以外の世界観】

引退することで、競技以外の領域に触れる機会は、否が応でも増える。特に、積極的にセカンドキャリアを探索しようとしればするほど、アスリートとしての世界観では通用しない出来事に遭遇することにもなる。例えば、Inf.は、「〇〇＜種目名＞ばかりやってきましたから、それ以外の世界に触れたことがなかった。だから、引退した後、職を探しているうちに、新しい自分っていうか、世界を見る目とでもいうか、そういった競技以外のことも経験できましたね」と語った。

【c16: 価値観の拡がり】

目標を達成すること、すなわち、試合に勝利することや自己記録の更新を目指してきたアスリートが、試合での負けや不調に折り合いをつけ、競技生活を閉じることを選ぶことですら、大きな価値観の変化が読み取れる。例えば、Inf.は、「そりゃ、今でも、誰にも負けたくないし、負けてもしない。でも、もう以前みたいに競わなくてもいいわけだから。仕事は、負けるが勝ちってところもある。勝つことばかりが大切な訳じゃない。なんか、自分が変わりました」と語った。

【c17: トップとしての自覚】

現役時代に、トップとして君臨したアスリートは、その自覚を強く意識している。日本の代表選手としての誇りにもまして、メダリストとしての知名度は非常に高く、そのことが良きにつけ悪きにつけ、本人の人物評価につながるという自覚を有している。例えば、Inf.は、「私は、金メダリストという看板を背負っている。だから、負ける訳にはいかない。それが、会社の中であつても同じ。皆が、私のことを金メダリストという目で見ている。いい加減なことは、絶対にできない。だからこそ、(引退した今でも)現役の時以上に頑張れる。私は、金メダリストして恥ずかしくない人生を歩まねばならない」と語った。

【c18: 目標を達成した満足感】

アスリートとして目標を充分達成したという満足感は、引退後の生活に対する満足の程度と深く関係している。すなわち、アスリートとしての目標を達成したという自信は、引退後の生活の礎となっているのであろう。例えば、Inf.は、「充分やりましたからね。もうこれ以上はないくらい。だから、競技生活には、ものすごく満足しています。だからこそ、次のステップも頑張ろうと思える。そう思うんです。それに、選手としてやり残したことがあつたら、きっと、今でも辞めていないかも。」と語った。

【c19: 充実した取り組みによる自信】

例え、アスリートとしての目標が達成されていなかったとしても、競技生活の中で、情熱的にスポーツに自己投入していたことは、引退後の生活に対する取り組みに大きく影響するものと予測できる。例えば、Inf.は、「結局、メダルは取れなかった。直前の数年間は、それだけが生き甲斐だった。でも、結局ダメだった。だから、全部がダメだとは思わない。一生懸命取り組んで、ダメだったら潔く辞めようと、何時の頃からか考えるようになりました。要は、自分が納得できる取り組みであればいい」と語った。

【c20: 競技を基にした信念】

引退後にアスリートとはことなるアイデンティティを模索し、新たなアイデンティティを獲得して後でさえも、アスリートとしての信念は、多かれ少なかれ維持される。特に、競技生活の中では、引退後の生活に充分役立つようなアスリートとしての信念を垣間見ることもある。例えば、Inf.は、「礼儀がちゃんとしていたり、目上の人を重んじたり、挨拶がきちんとできたり、スポーツやっていましたから自然にできる。そこは、今の職場の誰にも負けないと思っています。現役時代、鍛えていたのは身体だけじゃない。そのことが社会人になっても役立っている」と語った。

【c21: 比肩することのない取り組みへの誇り】

最後に、大きな目標を達成することで幕引きを考えるアスリートは少なくない。すなわち、無敵を誇りながら、周囲に惜しまれながら、やむなく現役を引退するアスリートは極めて少ない。まだ続けることができたんじゃないですかという問いかけに、Inf.は、「誰にも負けることなく引退したことが、今でも私の誇りなんです。そりゃ、続けようという気持ちであれば、続けられたかもしれない。でも、あの時、引退せずに続けていたら、その誇りを維持することができなかったかもしれない」と語った。

【c22: 支えてくれる人への感謝】

多くの人々からの支えがあつてこそ、大業は達成される。どんなレベルのアスリートも、懇親の支援なくして、目標を達成することはない。アスリートの多くが、そのような支援者への感謝の念を忘れずにいる。例え

ば、Inf.は、「お陰さまで、私は金メダルが取れました。私の競技生活を支えてくれた両親、妻や子供たち、先生や先輩、後輩、熾烈な競争をしたライバルにでさえも、今となって(引退した後)は感謝しています。いまでも、その感謝の気持ちを忘れずに、仕事をしています」と語った。

【c23: これ以上競争しなくてもいいという安堵感】

自己の目標を達成するためには、アスリートは過酷を極めた競争に立ち向かわねばならない。常に何かと競い合っていることが、アスリートがアスリートである所以でもある。しかし、引退することで、これ以上競争しなくても良いことになり、それを安堵と感じるアスリートもいる。例えば、Inf.は、「引退するってことは、もうこれ以上競争しなくてもいいんだなって思って、却って、ほっとしたっていうか、安心したっていうか。何かと、誰かと、競争するってことは、負けられないから、すごく辛い。」と語った。

【c24: アスリートであったことが役立つことへの期待】

アスリートとしての取り組みは、必ず、次の人生のステップで役立つという期待をアスリートは持っている。高い目標を設定し、生活を積極的にコントロールしながら過ごす競技生活で得た様々なスキルを、引退後の仕事に役立てられるという期待感、生活全般へ積極的に寄与する。例えば、Inf.は、「私も絶対何かできると思うんですよね。そう思うと、〇〇以外に自分には何ができるんだろうとワクワクする。オリンピックでメダルを獲った訳ですから、世界に一人しかいないんですから、それ以上大変なことはない」と語った。

【c25: やり残したことへの未練】

アスリートは、引退した後に、競技生活での積み残しに心を奪われることがある。例えば、Inf.は、「もう少しやれたかもしれない。あの時は、怪我で、もうこれ以上頑張れないって思いこんでいた。早まって引退してしまったと。ああ、あの時、もっと冷静に判断していれば、〇〇を続けられたのに。もしも、そうだったら、今頃、メダルを獲れたかもしれない。引退して、随分になるんですけど、未だに後悔しています。もっとやっておけばよかったって」と語った。

【c26: アスリートでないことへの実感のなさ】

引退後、アスリートではない新たなアイデンティティを獲得することは、決して容易なことではない。引退して10年以上経過しても、あたかもまだアスリートであるかのように、今も現役であるかのように、アスリートでないことを確かな実感として捉えられずにいる。例えば、Inf.は、「直ぐにでも、〇〇できるような感じがしてならない。でも、冷静に考えたらもう辞めて18年も経っているのに、気持ちだけは、なんかモヤモヤしている。特に、4年に一度のオリンピックの時期になると、ソワソワ落ち着かない」と語った。

【c27: 競争できない虚しさ】

引退後に、現役時代を省みて、ふと虚しく感じることもある。もうこれ以上競争しなくてもよいと安堵を感じる時もあれば、もうこれ以上競争できないのかと淋しく感じることもある。例えば、Inf.は、「辞めた直後は、もうやらなくていいんだと思って、ホッとすることもあったけど、でも、もうボールを追いかけることも、相手と対戦することもないんだと思うと、なんか淋しく思う。あの頃は、メチャクチャ情熱的な時分だった。けど、競争しないと、本当の自分でないような気がする」と語った。

【c28: やり遂げたことへの後悔】

引退後に、アスリートであったこと自体を後悔することもある。例えば、Inf.は、「自分の息子にオリンピックにいったことは、ごく最近まで黙っていました。だって、恥ずかしいことだもの。なんか自慢できることでもないし。それに、引退した直後、ひとつめの職場で働き始めた時に、周りが『どうせ、スポーツばかりやっていて何もできないんだろ』って白い目で私を見ていましたから。実際、出来ませんでしたから。もっと早くに辞めて、仕事やっていたら、また違った人生だったかもしれないって」と語った。

【c29: 今後の見通しのなさ】

現役時代、オリンピック出場、メダル獲得など、高い目標に向かって唯物的に取り組めば取り組むほど、引退後の生活の先行きの不安は大きくなる。長い間、競技に携わってきただけに、競技関連の領域では見通しが立つが、それ以外の領域では、全く見通しを立てることができない。例えば、Inf.は、「先が見えません。現役の時は、何をどうやったらいいのか分かっていましたが、引退後は、何をどうやったらいいのか、全く分からない。分からないんです」と語った。

【c30: 自分らしさの混乱】

アスリートとしてのアイデンティティから、アスリートではない新たなアイデンティティを獲得するために、ある程度の模索体験は不可欠であろう。しかしながら、自他共に、セカンドキャリアへのスムーズな移行を求められる傾向にある。例えば、Inf.は、「引退したことで本当の私は死んで、次の職場で新しい自分が生まれて燃えたってということになるはずだったんだけど、本当の自分が死んで、新しい自分もいなくて、結局、しんでしまっているような、そんな感じですかね」と語った。

【c31: えもいわれぬ焦り】

長きに亘り競技に没頭し、引退を迎え、はたと冷静になって周りを見渡した時に、周囲の同じ世代は、既に職場でそれなりのポストに就き、社会的に安定していることに気づくことがある。その際、アスリートは得体のしれない焦りに苛まれることになる。例えば、Inf.は、「32歳まで〇〇に没頭して、ふと気づいたら、同じ歳の連中は、職場でそれなりのポストに就いていて、サラリーだっけかなりもらっていました。それ見て、何かしなくてはと思って、でも、何をして良いのかも分からず、結局、何も手がつかなかった。この後の人生、本当に生きられるかなって思いましたよ」と語った。

【c32: 孤独感】

アスリートは競技生活の中で、お互いを信頼し合い、支えることのできる仲間を得る。しかし、競技以外の領域に移ることで、新しいヒューマンネットワークを構築するには、それなりの時間と労力を有する。このことから、引退後の生活で孤立した感じを免れ得ないこともある。例えば、Inf.は、「今の職場に移ってきて、宇宙人と話しているみたい。話が通じない。何をすればいいのか分からないから尋ねると、アドバイスをくれるけど、初めてで、その仕事特有の表現や言葉があって、理解できない。職場では、ひとり、ボーっとしている。」と語った。

【c33: 誰も振り向いてくれない独歩感】

現役時代、多くの人々からの称賛から、声をかけてもらう機会が多かった。世界の桜舞台に立ち、受けた

応援には感動すら覚えた。しかし、引退した今となっては、誰も気づいてくれず、声をかけられることもない。独りぼっちになった感じがする。例えば、Inf.は、「オリンピックの時は、誰もが頑張れって言ってくれた。直後も、誰もが「オリンピックの〇〇さんでしょ」って寄ってきてくれた。でも、今は、どこの誰だか分からない。私の周りには誰もいない。これからも独りで人生を歩んで行かなくちゃならない」と語った。

[考察]

ここでは、33 個のカテゴリーから7個のカテゴリーグループを生成し(Tab.2)、これらの概念間の関係を図示し(Fig.2)、発展継承可能な仮説的知見を導き出した。以下では、その詳細について触れる。

Tab.2: 生成されたカテゴリーとカテゴリーグループ

cg01: アスリートからの解放
c01: 時間的自由さ
c02: 競技以外の選択肢の拡がり
c04: 自分の手で稼ぐということ
c05: 身体的苦痛からの解放
c23: これ以上競争しなくてもいいという安堵感
cg02: アスリート以外の役割の獲得
c03: 社会的役割の認知
c06: 行動範囲が広がること
c15: 競技以外の世界観
c16: 価値観の拡がり
c22: 支えてくれる人への感謝
c24: アスリートであったことが役立つことへの期待感
cg03: アスリートでありつづけること
c07: 一時的な注目
c11: 社会的認知度の低下
c17: トップとしての自覚
cg04: アスリートではない空虚さ
c08: 競技ができないこと
c14: 目標のなさ
c26: アスリートでないことへの実感のなさ
c27: 競争できない虚しさ
c31: えもいわれぬ焦り
c32: 孤独感
c33: 誰も振り向いてくれない独歩感
cg05: アスリートとしての負目
c09: 年齢がいきすぎていること
c12: キャリア範囲の限定
c10: 思い通りにいかないこと
c13: 怪我による制限
c29: 今後の見通しのなさ
c30: 自分らしさの混乱
cg06: アスリートとしての自信
c18: 目標を達成した満足
c19: 充実した取り組みによる自信
c20: 競技を基にした信念
c21: 比肩することのない取り組みへの誇り
cg07: アスリートとしての後悔
c25: やり残したことへの未練
c28: やり遂げたことへの後悔

1) カテゴリーグループの生成

33 個のカテゴリーの意味内容を検討し、7つのカテゴリーグループを導き出した。以下では、これら7つのカテゴリーグループについて、解説する。ちなみに、下記の[cg(No.):○○○]は、導き出されたカテゴリーグループの ID とカテゴリーグループ名を表記している。

[cg01: アスリートからの解放]

まず、【c01:時間的自由さ】、【c02:競技以外の選択肢の広がり】、【c04:自分の手で稼ぐということ】、【c05:身体的苦痛からの解放】、【c23:これ以上競争しなくてもいいという安ど感】をまとめて[cg01: アスリートからの解放]を生成した。アスリートは、束縛されてきた競技生活から解放されたことによる自由さや安堵や喜びといった感情を体験していることが読み取ることができる。そのような背景から、[cg01: アスリートからの解放]と命名するに至った。

[cg02: アスリート以外の役割の獲得]

次に、【c03:社会的役割の認知】、【c06:行動範囲が広がること】、【c15:競技以外の世界観】、【c16:価値観の広がり】、【c22:支えてくれる人への感謝】、【c24:アスリートであったことが役立つことへの期待感】をまとめて[cg02: アスリート以外の役割の獲得]を生成した。アスリートは、引退することで、アスリート以外の役割を新たに獲得し、その世界観や価値観を広げるような経験をしていることが読み取れる。そのような背景から、[cg02: アスリート以外の役割の獲得]と命名するに至った。

[cg03: アスリートであり続けること]

そして、【c07:一時的な注目】、【c11:社会的認知度の低下】、【c17:トップとしての自覚】をまとめて[cg03: 内面ではアスリートであり続けること]を生成した。cg02 で示したように、アスリートは、引退後に、外的なキャリアとして新たな役割を獲得していく。その一方で、内的なキャリアは、ある種、アスリートであることを維持し、その後の人生においても、競技生活に得たものをつなげていく作業をしていくことが読み取れる。そのような背景から、[cg03:アスリートであり続けること]と命名するにいたった。

[cg04: アスリートではない虚しさ]

続いて、【c08:競技ができないこと】、【c14:目標のなさ】、【c26:アスリートではないことの実感のなさ】、【c27:競争できない虚しさ】、【c31:えもいわれぬ焦り】、【c32:孤独感】、【c33:誰も振り向いてくれない独歩感】をまとめて[cg04:アスリートではない虚しさ]を生成した。引退し、数年たった後でも、アスリートは、今にでも現役であるかのごとく、引退したことの実感を持てずにいる場合がある。そこでは、新たなアイデンティティを獲得しても、アスリートであったことは、個人の人格の根底に脈々と位置付けられていることを垣間見ることになる。そのような背景から、[cg04:アスリートではない虚しさ]と命名するに至った。

[cg05: アスリートとしての負目]

更に、【c09:年齢が行き過ぎていること】、【c10:思い通りにならないこと】、【c12:キャリア範囲の限定】、【c13:怪我による制限】、【c29:今後の見通しのなさ】、【c30:自分らしさの混乱】をまとめて[cg05: アスリートとしての負目]を生成した。アスリートではない新たなアイデンティティの下で困難に直面すると、アスリートであったことに負目を感じる場合もある。それは、往々にして自分の置かれている立場と周囲との比較によ

って生起する。そのような背景から、[cg05: アスリートとしての負目]と命名するに至った。

[cg06: アスリートとしての自信]

次に、【c18:目標を達成した満足感】、【c19:充実した取り組みによる自信】、【c20:競技を基にした信念】、【c21:比肩することのない取り組みへの誇り】をまとめて[cg06: アスリートとしての自信]を生成した。アスリートとして有するに至った自信や誇りは、引退後の人生を積極的に過ごす上で、大きく寄与する。そして、キャリアトランジションに伴う様々な困難を乗り越えていく上で、個々のアスリートの支えとなっている。そのような背景から、[cg06: アスリートとしての自信]と命名するに至った。

[cg07: アスリートとしての後悔]

そして、最後に、【c25:やり残したことへの未練】、【c27:やり遂げたことへの後悔】をまとめて[cg07: アスリートとしての後悔]を生成した。ひとの後悔は大きく分けて非行為後悔と行為後悔の2つ大別して理解することができる(ローズ, 2008)。すなわち、前者は「(やらなかったが)やっておけばよかった」と後悔することを指し、後者は「もっとこうしておけば良かった」と後悔することを指す。そういった過去の出来事に対する後悔のあり方が、その後の取り組みに影響することは免れ得ないといえよう。そのような背景から、[cg07: アスリートとしての後悔]と命名するに至った。

このように、7つの概念によってアスリートのキャリアトランジション体験を捉えることができることを導き出した。

2) カテゴリーグループ間の検討

次に、この7つのカテゴリーグループ間の関係を矢印で表し、Fig.2 のような概念図を作成した。そして、この概念図を基に9つの仮説的知見(関係性)を導き出した。ちなみに、Fig.2 の中で、実線の矢印は正の関係として、破線の矢印は負の関係として、それぞれ読み取ることができる。以下では、その詳細を示す。

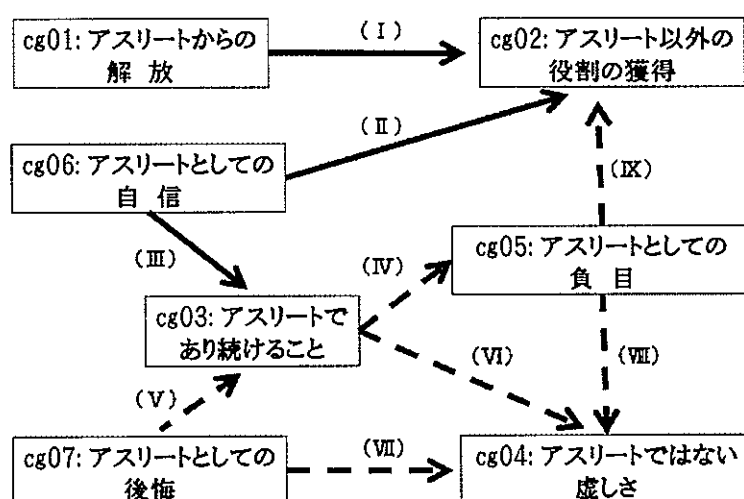


Fig. 2: カテゴリーグループ関連図

(Ⅰ)[cg01: アスリートからの解放] → [cg02: アスリート以外の役割の獲得]

アスリートであることから心身ともに解放されることは、アスリート以外の役割を獲得していくことに大きく寄与する。アスリートは引退をしたことで、それまで競技生活に費やしていた時間を、新たな役割獲得のために費やすことができるようになることが予測できる。

(Ⅱ)[cg06: アスリートとしての自信] → [cg02: アスリート以外の役割の獲得]

アスリートとして築き上げてきた自信は、アスリート以外の新たな役割を獲得していくことに大きく寄与する。すなわち、アスリートとしての取り組み中には、多くの努力を伴った克己が含まれており、そのような取り組みがアスリートではない新たな役割を獲得するためのベースとなることが予測できる。

(Ⅲ)[cg06: アスリートとしての自信] → [cg03: アスリートであり続けること]

アスリートとして築き上げてきた自信は、引退した後も、表面的にはアスリート以外の役割を獲得しながらも内面ではアスリートであり続けることに寄与する。すなわち、アスリートとして形成された信念や信条は、個々の人格のベースをなしていることが予測できる。

(Ⅳ)[cg03: アスリートであり続けること] → [cg05: アスリートとしての負目]

アスリートではない新たな役割を獲得した後でも、内面ではアスリートであり続けることで、負目を感じることもある。すなわち、引退した後、アスリートであったがために周囲と比較して年齢的に行き過ぎてしまっていることや自分らしさを見失ってしまうことを負目と感じていることが予測できる。

(Ⅴ)[cg07: アスリートとしての後悔] → [cg03: アスリートであり続けること]

アスリートとしての取り組みに後悔していることは、アスリートではない新たな役割を獲得した後でも、内面ではアスリートであり続けることにつながっている。すなわち、競技生活での非行為後悔(やっておけばよかった)や行為後悔(もっとこうしておけばよかった)は、新たな役割が獲得された後でも内面ではアスリートであり続けることを余儀されることが予測できる。

(Ⅵ)[cg03: アスリートであり続けること] → [cg04: アスリートではない虚しさ]

アスリートではない新たな役割を獲得した後でも内面ではアスリートであり続けることから、なんとも表現のしようがない虚しさを経験していることがある。すなわち、内面ではアスリートであり続けることは、現実と内面のギャップやアスリートであったことと今とのつながりのなさ、孤独感や独歩感につながっている。

(Ⅶ)[cg07: アスリートとしての後悔] → [cg04: アスリートではない虚しさ]

アスリートとしての取り組みに後悔していることから、なんとも表現のしようがない虚しさを経験している。すなわち、競技生活での非行為後悔(やっておけばよかった)や行為後悔(もっとこうしておけばよかった)は、もはやアスリートではないことへの虚しさに拍車をかけることになる。

(Ⅷ)[cg05: アスリートとしての負目] → [cg04: アスリートではない虚しさ]

アスリートであったことに負目を感じることで、なんとも表現のしようがない虚しさを経験している。すなわち、アスリートであったがために周囲と比較して年齢的に行き過ぎてしまっていることや自分らしさを見失っ

てしまうことを負目と感ずること、もはやアスリートではないことを虚しく感じていることが予測できる。

〔IX〕〔cg05: アスリートとしての負目〕-----➡〔cg02: アスリート以外の役割の獲得〕

アスリートであったことに負目を感じることは、アスリート以外の新たな役割を獲得していくことを阻害する恐れがある。すなわち、アスリートであったがために周囲と比較して年齢的に行き過ぎてしまっていることや自分らしさを見失ってしまうことを負目と感ずること、新たな役割を獲得するための動きを抑制してしまうことが予測できる。

このように、本研究は、「アスリートは、キャリアトランジションをどのように経験するのか」といった RQ の下、質的なアプローチを行ってきた。その結果、『アスリートは、アスリートとして築き上げた自信を背景に、アスリートではない新たな役割を獲得していく。これには、アスリートであることから心身ともに解放されることが寄与する。その一方で、アスリートではない新たな役割を獲得するとともに内面ではアスリートであり続けるといった両行(やまだ, 2007)を経験し、そこでは、後悔や虚しさを伴う。特に、アスリートであったことに負目を感じていることが、アスリートではない新たな役割の獲得を抑制してしまうこともある』という仮説的知見を導き出した。

〔まとめ〕

ここでの目的は、アスリートがキャリアトランジションにおいて直面する心理社会的発達課題を同定することにある。上記の仮説的知見を勘案すると、アスリートにとってキャリアトランジションは、何かを失い、何かを得ていくといった両行として経験されており、そこでの心理社会的発達課題として捉えたい。それは、1) アスリートとしての自信を引退後の新たな役割につなげること、2) アスリートとしての後悔や虚しさ、負目と直面しつつ、自己に折り合いをつけること、の2点である。

IV 総合的考察 (〔課題 3〕アスリートの「人生支援」へ向けての提言)

本研究は、アスリートのセカンドキャリア支援プログラムを検討するために、〔課題 1〕セカンドキャリア支援プログラムの質的な検討、〔課題 2〕アスリートが直面する心理社会的発達課題の同定、という2つの側面からアプローチしてきた。ここでは、上記の2つの課題について包括的な議論を展開し、アスリートの「人生支援」へ向けての4つの提言をまとめた。

《提言 1》セカンドキャリア獲得に向けて外的なキャリアと内的なキャリアのバランスを図る

〔課題 1〕において、国外のセカンドキャリア支援プログラムの特徴として、キャリアカウンセリングを中心の介入方略としていることを挙げた。キャリアカウンセリングでは、キャリアトランジションに直面したアスリートとカウンセラーの共同作業に多くの時間と労力を要することになる。そこでは、「語り」を方法論として個人の外的なキャリアと内的なキャリアとのバランスを図る可能性を見出すことができよう。

《提言 2》現役生活を充実させるためのセカンドキャリア支援であるという位置づけを図る

〔課題 1〕において、国内のセカンドキャリア支援プログラムに共通していたのは、現役時代の充実した取り組みが、引退後のセカンドキャリア形成に寄与するといった見解であった。すなわち、アスリートのパフ

パフォーマンス向上のためのキャリア教育を重視し、セカンドキャリアを見通した中で、安心して競技生活に取り組めるような規範を、スポーツ環境の内外に位置付けることが求められる。

《提言 3》アスリートとしての役割がアスリートではない新たな役割のベースとして折り合いをつける

【課題 2】において、アスリートとして獲得した自信が、引退後に獲得するアスリート以外の役割の形成に寄与することが導き出された。すなわち、アスリートとしての役割が、引退した後に獲得するであろうアスリート以外の役割のベースとなり得る。もはやアスリートでなくなった後でも、内面ではアスリートであり続ける側面がある。このことを肯定的に認識することで、アスリートとしての役割とアスリートではない役割をつなぐような、質感を伴った実感を抱けるようになるであろう。

《提言 4》アスリートが複雑な心境であることを理解し、折り合いをつけるような取り組みを促す

【課題 2】において、アスリートとしての後悔はアスリートであり続けることやアスリートではない虚しさに、アスリートでありつづけることはアスリートではない虚しさやアスリートとしての負目に、アスリートとしての負目はアスリートではない虚しさやアスリート以外の役割の獲得に、それぞれ負の関係性を有していることが確認された。このような複雑な関係性は、個々のアスリートのセカンドキャリア獲得における苦悩の一端を表している。従って、このような複雑な心境を有しながら、アスリートはセカンドキャリア獲得に直面していることを深く理解し、専門的な介入方略を検討する必要がある。

謝辞

本研究は、財団法人上月スポーツ・教育財団 第5回(2007 年度)スポーツ研究助成事業の補助を受け、遂行されました。多くの方々の過分のご配慮があつてこそ本研究が成り立っていることは筆舌に尽くし難く、本研究にご協力いただきました方々のプライバシーを保護する上からお名前を挙げることはできませんが、ここに深く感謝の意を表します。

文献

- Levy, M.A., Gordon, L., Wilson, R., and Barrett, C. 2005 Career Transition. In: Taylor, J. and Wilson, G.S. (Eds.) Applying sport psychology: four perspectives(Chapter 15). Human Kinetics: Illinois, pp. 249-266.
- ニール・ローズ 2008 後悔を好機に変えるーイフオンリーの心理学ー. 村田光二監訳 (Neal J. Roese 2005 If Only: How to turn regret into opportunity) ナカニシヤ出版.
- 小川千里・豊田則成・服部泰宏・金井壽宏・重野弘三郎 2009 トップアスリートの引退時におけるキャリア・トランジションー生の語り(ナラティブ)、理論的展望と実践的含意ー. 経営行動科学第 22 巻 143-160.
- 佐藤郁哉 2006 フィールドワーク. 新曜社.
- 田中ウルヴェ京ほか 2006 アスリートのキャリアトランジション 「キャリア」に着目する意味とは. 日本スポーツ心理学会第 33 回大会研究発表抄録集. 7-8.
- 豊田則成・中込四郎 1996 運動選手の競技引退に関する研究 自我同一性の再体制化をめぐって. 体育学研究第 41 巻 193-206.
- 豊田則成・中込四郎 2000 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討.

体育学研究第 45 巻 315-332.

豊田則成 1999 アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究—中年期危機を体験した元オリンピック選手—. スポーツ教育学研究第 19 巻 117-129.

豊田則成 2006 研究の視点:アスリートのキャリアトランジションの意味。田中ウルヴェ京ほか アスリートのキャリアトランジション 「キャリア」に着目する意味とは. 日本スポーツ心理学会第 33 回大会研究発表抄録集 7-8.

豊田則成 2007 元アスリートの語る「人生の物語」. Business Insight (神戸大学現代経営学研究所) No.59 22-35.

筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト 2006 トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのカリキュラム開発(2)平成 18 年度報告書.

やまだようこ 2007 喪失の語り 生成のライフストーリー. 新曜社.

吉田毅 2006 アスリートのキャリア問題. 菊地一他編 現代スポーツのパースペクティブ. 大修館書店 pp.210-227.

以上